

平成 30 年度が始まりました。平成 28 年 4 月に着任、1 学期終業式に合わせてシンフォニー創刊、以来、始・終業式のたびに発行し、12 号となりました。季節感や自然を愛でる素養に欠ける私は、そういった内容は一切書かない枕なし。今日もいつもの「固い」内容を、いつもどおり？「柔らかい」表現で叙述していきますが、その前に、シンフォニーのバックナンバーの紹介です。

シンフォニーのバックナンバーは、本校公式ホームページに掲載されています。折に触れて、読み返してほしい内容がたくさんあります。処分してしまった人は、是非、HP から打ち出し、紙ベースでストックしておいてほしいと思います。新入生の皆さんは、早速、バックナンバーを読んで、「港北高校の学び」をより深く理解してください。

授業の構えと書くことの大切さ

前号にも登場した京都大学教授・溝上慎一先生、溝上先生の最新作『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』（東信堂／2018 年 2 月 28 日初版第 1 刷発行）という本（以下『基本形と身体性』という。）があります。「生徒の身体性」というのは、授業における生徒の「身体表現性」のことであり、「表現」とは身体の「向き、動き、態度」のことです。「身体性」という単語の持つ語感・ニュアンスを無視するならば、「授業態度」ということになります。この授業態度というものが信用ならんというのは講義一辺倒の授業（講義型授業）の場合です。講義型授業では、いくら授業態度が良くとも脳がアクティブ（活動的）にならない人の方が多い。その結果、何人かは寝てしまうという忌々しい風景が展開されます。（本校ではあり得ません。あってはなりません。）

話を元に戻しましょう。講義型授業では、いくら授業態度が良くとも脳がアクティブ（活動的）にならない人の方が多い。しかし、協働学習（活動）を取り入れた授業では、授業に対する構え（身体性）の良し悪しが、そのまま活動のアクティブ度に直結し、即ち脳のアクティブ度に直結するということになります。そこで、溝上先生は全国の構えの良い授業の風景を『基本形と身体性』に掲載しました。本校では、家庭科の黒田順子先生、英語科の潮来友梨先生が取材されました。両授業とも生徒は見事な構えを見せましたが、英語科の構えは他校にも良い例があり、家庭科については港北以外になかなか見つからないということで、本校は黒田先生に代表していただき、その授業風景写真が『基本形と身体性』29 ページに掲載されていますので紹介しておきます。が、黒田先生はあくまでも本校代表、潮来先生は勿論のこと、本校のすべての先生は、「授

業の構え」を大切にしていることを強調しておきたいと思います。(ちなみに、潮来先生は、平成 29 年度県優秀授業実践教員表彰を受賞しています。)

次に、『基本形と身体性』における「アクティブラーニング型授業の基本形」についてです。これはもう、『基本形と身体性』の数年前から溝上先生が提唱していることなので、29 年度までの本校の職員は、知識としては全員が知っています。その知識を、実践につなげられるか否かが本校の全教員に課せられた課題であることをこの機会に生徒の皆さんにも知っておいてもらいたいと思います。

さて、その「アクティブラーニング型授業の基本形」ですが、これは、「個—協働—個の学習サイクル」と「内化—外化—内化の学習サイクル」ということになります。内化はインプット、「読む」「聞く」等による知識習得、活動(外化)後の振り返りやまとめ等による理解の深めです。外化はアウトプット、「書く」「話す」「発表する」等による理解の深め、思考の表現、可視化です。関西大学の森朋子教授、この方は溝上先生の盟友であり、この森先生のご指導も本校は受けました。その森先生曰く、「内化なき外化は盲目であり、外化なき内化は空虚である。」と。私としては、「盲目」「空虚」は逆の方がピンと来るし、そもそも「盲目」という比喻は使いたくない。なので、失礼ながら書き換えさせていただくと、「内化なき外化は空虚であり、外化なき内化は浅薄である。」ということになります。

「個—協働—個」「内化—外化—内化」、この二つのサイクルは、概ね重ね合わせることができます。つまり、「個≡内化」「協働≡外化」ということですが、あくまでも「≡」であって「=」ではない。「個による外化」「協働による内化」があるわけで、ここで特に強調しておきたいのは、「個による外化」、即ち、「書く」ことです。「書く」ことなしに、「主体的・対話的で深い学び」はあり得ません。

つまり、「①個による内化(読む・聞く)②個による外化(書く)③協働による外化(話す・発表する)④A 個による外化(学習内容のまとめを書く)&④B 個による内化(先生によるまとめを聞く)」というサイクルです。②を抜いて、①から③に行けば、③は深まりません。④B だけで④A がなければ学習内容は定着しません。

センター試験は 2019 年度(2020 年 1 月実施)まで、2020 年度からの共通テストでは、国語・数学の記述式のみならず、全科目の選択式問題で思考力・判断力が問われます。思考力・判断力・表現力を鍛えるために、皆さん、書きましょう。そして、何度も言いますが、その傾向は必ずや 2・3 年生、センター試験世代の個別大学問題にも影響を与えます。そのことを見据えて、港北高校は、逸早く、アクティブ・ラーニングの視点による「主体的・対話的で深い学び」の実現、「課題を発見し解決するために必要な『自ら主体的に学び続ける力』」の育成に取り組んでいます。そのためには、「書く」ことです。**さあ、皆さん、書きましょう。**